

# 談

# 話

(講演大要)

— はなしあひと詩の吟誦 —

新庄よしこ

私は幼稚園保育項目中の談話について考へたことを少しばかりお話しいたします。

幼稚園生活の中で談話といふ中にはこれだけのことが含まれて居ると思つて居ります。

- 一、おはなし
- 二、繪ばなし
- 三、はなしあひ

先生がする  
幼兒がする  
童話を讀んでかせる  
話の筋が繪であらしてある  
繪雑誌を見る  
組全體  
一人づゝ  
幼兒と幼兒と

四、詩の吟誦 詩

短い童話

五、人形芝居 先生の演出

幼兒の演出

六、兒童劇

かうして見ると一口に談話と云つても、なか／＼範圍が廣いのでございます。談話の文字の意味は、はなし、ものがたり、であります。幼稚園保育項目に擧げられたる場合の解釋は、幼稚園に於ける一切の幼兒文藝と申しますか、幼兒文學と申しませうか、是等を一括して稱したる言葉、ごく廣い内容を持つのでございます。

私は右の中で、はなしあひと詩の吟誦について主にお話

するつもりですが、右の一つ一つについて述べたい事もございませうのでごく簡単に。

## (一) おはなし

従來の幼稚園の談話は、このおはなしにのみ限られて居たかの誤解があります。即ち或る一つの童話の筋を先生がその組の幼兒に物語つて聞かせるので、この場合幼兒は物語りに従つて喜んだり、心配したり如何になりゆくかと想像したりするので、幼兒の心的態度は全然受動的であります。

人々の解釋のしかたで、いろ／＼になりませうが、おはなしといふ言葉の意味から考へますと童話そのものゝ意味にもなりますが、私は、童話といふことは、幼兒に與へる話そのものであつて、その童話を語り傳へることをおはなしと解釋して居ります。

このおはなしについては夫々研究された専門家が多くあり、これに關する参考書も澤山あるといふわけで、今更私の申すことは殆んどありません。材料も豊富に備はつてゐ

ます。むしろあまり便利すぎて、今度はかういふ話をして見やうと計畫をたて、出来ることなら創作を試みる、この自分の話がどんなに子供にひびくであらうかといふ期待を持ち、或は新しいものを作り出すあの苦しみを味ふといふやうな事が無くてすんでしまふ、餘分な苦しみはしない方がいゝ様なものゝ、困らないからいゝと云つたやうな安逸に流れがちでは無からうかと思つて、自分をふり返ることも度々あります。

創作の才能を持つて居る人でも、外から供給せられる豊富な材料のおかげを蒙り過ぎるのではないかと、さういふ人の爲に惜しいことゝも思ひます。

又話し方の方面から考へて見ても、それに關する行届いた注意なり、理想的方法なりを記したものが澤山にあるので、それは省略いたします。

たゞ一言、それはお話を幼兒に聞かせて居る時いつも感じることですが、話し手となる先生が、その組の幼兒に話を傳へることを楽しむといふこと、即ち話し手もきゝ手も一つの物語りを楽しみつゝ話し、楽しみつゝ聞くこと云つた

雰圍氣をかもした上でのおはなしが最も効果があります。勿論それ迄には保姆としての教養の一つとして材料の選擇なり話し方の研究なりに就いてのよい参考書を読み、人の話も聞くことは是非必要ですが、この教養だけでは子供へうまく話の出来るものではありません。それだけでは子供の心をおはなしへひきつける事は出来ません。話を聞いて居てくれる時のあの顔、あの腫、その話がびつたりと幼児の心を惹いたか、失敗に終つたか、ほんとによく組の先生にはわかるものです。話し中で可笑しい所が出てくると、きつと一番先に笑ひ出すあの子、つゞいて二三人が、是れにつられて笑ひ出す、全體が何となく朗らかになる、お話がはづむ、かうなつて來ると今、保育でおはなしをしてゐるなどあらたまつた氣持にはなれません。

おはなしで、話す方の注意はかなり進んで研究されて居りますが、聴き手の方が、きゝ上手になる、幼児をきゝ上手にすることも、お話の大事な條件かと存じます。度々きゝ話が幼児の心を惹きつけるものであれば、自らきゝ手の

方が、きゝ上手になつて呉れることは、いふ迄もない事です。すが、いつもお話しをしやうと思つて必ず思ひつく二つ三つのことがあります。

イ、幼児の氣分が落つてから

今迄庭で駈つこをしてゐた、積木の電車を走らせてゐたといふ幼児達が、おはなしだからと云つて、とんで來た、喜んで飛んで來たとしても、前の遊びが幾分でも心に残つて居れば話はしにくい、未だ残つて居るであらう遊びのつゞきや、雜念が無くなつてから始めること。ざわ／＼してゐるのを急にピツタリと止める事も出來ますまい、一人づゝ名を呼んで自分の椅子を持つて話を聞きに來させる、その他の子は、自分の名をよばれる迄しづかに待つてゐる、こんな事で全體の氣持を落つけてからといふ事も、一つの方法でございませう。

ロ、手に何か持物のないやうに

さつき迄庭で遊んで居て、摘んだ草の葉、或は、色紙のはし切れなどがエプロンのポケットにしひびこんで

ゐたなどは、話の前に必ずあづかります。一寸したすきからそれに氣を取られる事も往々見うける事です。

ハ、幼児の腰かけ方

すぐ騒ぎたくなる子、友達を突いて見たくなる子、さういふ子を隣同志に腰かけさせぬよう。

自分が騒いだ爲に全體の靜かな空氣を亂す事は恥づべきことゝいふこの心も幼児に養つておきたいもの、これがおはなし、唱歌などはよい機會でございませう。

## (二) はなしあひ

先生のおはなしを聞くといふばかりでなく、子供の心中に持つてゐる話したいことを引き出してやり、先生と幼児とが、互ひに話し合ふ事によつて、次から次へと話の内容が展開されてゆく場合を私は、はなしあひと申して居ります。

それは談話といふ改つた事の中に含ませる程、特に云ひ出すのが可笑しい程當り前のことで、日常生活に、時と場所と内容とを選ばず無意識に行つて居る事です、又考へ

て見ると、是れを當り前の事として看過し去つてしまふ事は出来ないと思つてゐます。あの幼児の、殊に入園當初の年齢を考へて見ると、幼児が云はうとしてゐる事、思つてゐること、感じて居る事等が相當な内容を持つてゐても、それを言語として發表することはの種類を多く持つてゐません。今迄は家庭内で両親、兄弟のごく親しい人々、生れてからずつと生活を共にして來てゐる人々、それ等がその子の心を申分なく察してゐて、子供の發言がたつた一ことでも用の足りる場合が多かつたのですが、幼稚園では始めて對他關係にぶつかつて來たのです。そこで觀念内容を現すべき言語を用ふる機會に度々あはねばなりません。この意味に於てこのはなしあひは、幼児の發言を導くならかな方法でありますから、幼児の方は特に話したいといふ意識はないでせうが、先生は無意識に聞き流してはすまないこととでありませう、故にこのはなしあひが談話の一つの形式として重要な位置を占めてゐる事を、——從來もずつとつけて來てゐる事です——思ふべきであります。

話しあひの場合

イ、先生と組の幼児全體と

ロ、先生と一人の幼児と

ハ、幼児と幼児と

(イ) 先生と組全體と

これはおはなしの時と同じく先生のまはりに組全體の幼児が腰かけます。幼児の方から發表した事を、先生が受けて適當に處理してゆく、或は先生が幼児に話しかけて發言を求めるといふ場合、月曜日に日曜の出來事をきくとか、夏休みのあとで、思ひ出を語り合ふとか、この時などは三日も四日も朝の一時をこれで過す事があります。

○日曜の出來事などは云ひ度い子が多勢の時、一番先に申し出た子から順々に發表すること、友達が話してゐる時は靜かにきいて居て、自分の順番を待たせるやうに。

○すら〜云ひこなせる幼児を先に。

「昨日動物園へ行つたの」と云つただけで、その様子をきくと一向わからなかつたり、聞くと、いや、とい

ふ、いやといふのはちきに眞似をしたがるもの故、最初の幼児を選ぶ必要があります。

○その話が、他の幼児が羨しがる様な場合は、多少先生は注意を要します。勿論進んで發表する場合、面白い處に行つたとか、何か買つて頂いたとかいふのが多くて、幼児の方でも大人が思ふ程關心は持ちませんが、長い間には、「いゝ處に行つた」「何を買つて貰つた」がひよつと子供ごころに響がないとも限りません、發表の爲めに是等を要求するといふ反對の結果にならぬやうに。

○いつもおはなし合ふ子は決つて居て、云はない子は黙つてばかりといふ時、先生はすぐ氣のつくものです。これは云ひたいが、何かの原因があつて出來ないのか、全然厭なのか、前の場合は、云へるやうに手傳つてやる、又云へない子にも相當のはからひをすることが要りませう。

(ロ) 先生と一人の幼児と

即ち個人的はなしあひは、隨時隨所に行はれるのであつて特別な注意もいらぬ事です。幼児の中で、すぐに先生には親しみ、友達は出来る、幼稚園が面白くて／＼たまらない子にとつては、特にこれが必要としない、といふより機會が無くてすみませう。特に是を必要とする、大變必要な場合があります、それは友達とは遊び得ない、さりとて先生の側には猶行かれない、先生から話しかけられても返事も出来ない子、こんな子は、いつ迄たつても友達は出来ずブラ／＼してゐます。いつそ思ひ切つた悪戯とか、喧嘩をしてくれる方がどんなに樂か、ブラ／＼してゐる位氣になる子はありません、折角友達の手とつなぎ合せてやつて見てゐると、室から廊下へ、廊下から庭へと出て行く中にいつの間にか又一人廊下のかべに置きざりにされてゐる。

かういふ子へは、先生が進んで行つて、はなしあひの一時を意識的に作つてゆくのです。なか／＼手腕の要る事です、かたくなな心をほごして行つて、一口でも話を引き出す事にとめて行きます中に先生へだけは話をするといふやうにもなりません。

### (ハ) 幼児と幼児と

これが最も自然的なはなしあひでございませう。心して聞いて居ると誠に面白いことで、繪本の中の繪から、積木でつくつた家と家とから、砂場で掘つた大きな穴から、思はず話がひろがつて行つて、遊びから始つた話が、遊びを捨て、しまつて、はなしに、夢中になつてゐる事があります。この場合、先生は全然はいらぬで、それどころでなく、聞いて居る事さへ氣づかれないようにしたいものですと云つて無關心ではなく、このはなしあひの移り行きは是非先生は聞いておくべきで、その時先生は、うしろ向きで外の事をしてゐてもよいであります。

### (三) 詩の吟誦

幼児が一つの詩を何日かかゝつて、すつかり覚え込んではしまひ、更にこの詩を吟誦することを談話の一つとして、以前からつゞけて居ります。

詩といふと格別香りの高いものゝやうに聞えますが、さりとて童詩と區切るのもどうかと思ひ、たゞ、詩と申して

居ります。

雨

スチイブソン原作  
葛原 滋譯

雨はどこにも降つてゐる  
家にも木にも降つてゐる  
傘の上にもふつてゐる  
海の船にも降つてゐる

ひのまるのはた

倉橋惣三作

われらのこつきは日の丸のはた  
高く立てよ 高く立てよ

朝日のいろをあかくそめて  
あかるいそらにひらくと  
かどやく光り 日の丸のはた

たかくたてよ たかく立てよ

われらのこつき 日の丸のはた

かういふ詩を幼児と、何日か、かゝつて暗誦し、吟誦するのでございます。これを、分けてお話しいたしませう、

### 1、あつかひかた

例へば「日の丸のはた」ならば、まづ先生が一通り、これを讀んできかせます。つゞいて三度か四度、面白そうによみます。かうしてあの子供達にとつても親しみのある日の丸の旗を、あの赤と白との日の丸の旗が一度幼児の心像として浮び出て來たと思つたならば、一句づゝ皆でうたひます。先生が一句云ふと、次に同じ句を幼児が云ふ、これを二三度、又次の句をと幾度かくり返し、幼児がすつかり覚え込んでしまふ迄何日かかゝつてやります。この時先生自身も、赤と白との單色から成る、而かもこの詩から湧き出て來るわが日の丸のおごそかさ、と未來への希望、とを心に思ひ浮べて、吟誦するのでございます。

### 2、詩の選びかた (詳細は略す)

イ、全體の心持がすぐわかるもの

ロ、句調のよいもの

ハ、短さ

## ニ、大人の詩

こゝに大人の詩と特に記したのはわけがあります、是れに子供の詩を用ひたいと思つて、随分探して見たのですが、どうも子供の詩は、餘り詩としての價値が高すぎて、詩そのものとしては上出来のものであるが、それだけにその子の個性があまりあらはれてゐる、詩の吟誦の場合は、特にどの子にといふわけがなく、三十人なら三十人の幼児、同じくその詩の情趣にひたり得る可能性を要とするので、これは、大人の作の普遍性を有つものを選びよしいたします。

## 3、創作への導き

スチブソンの雨の詩を子供はすつかり覚え込んでしまひました後の或日、雨の降る日でした、少しづつゝのびてゆく藤の實の目につくころ、外遊びも出来ぬ組の子等は、ふと雨脚をながめ乍らはなしあひが始りました。そこであの雨の詩を思ひ出しみんなで、吟誦したのですが、この幼稚園の庭にふりそゞあゝの雨を、子供がどう云ひあらは

すかと、とつさに考へついたのでみんなを呼びました、一同が庭の雨を眺められるやうな位置に落ついた時、私は、雨はどこにも降つてゐるのね、ほら、見て御覽なさいそれぢや幼稚園の雨を見ながら歌をつくりませうね。と申しましたすぐ次から

○雨はぶらんこに降つてゐる  
○雨は花にも降つてゐる  
私は大急ぎで紙と鉛筆を持つて來ました。

○すべり臺にも降つてゐる  
○わくのぼりにもふつてゐる  
○雨はどろにも降つてゐる  
○雨はみぞにも降つてゐる  
○小學校にも降つてゐる  
○あつちの門にも降つてゐる  
○東中野にも降つてゐる

(自宅東中野の子)

かうして一つの合作が出来上りました



幼児は、先生からある童話を聴く、その時全然受身の態度であるが、それでも、その話の追隨と鑑賞とによつて不知不識の間に幼児の種々の能力、情緒とか、想像とか、知力とか、理性等を啓發されて、日々のびて行く幼いものの心の糧となつて居るのでありますから、わがものとした詩を暗誦する事によつて、能動的心の方面を強く刺戟され、他から與へられたものを眞に幼児自身の一部に消化し、融合して、これの形をかへて自發的に再現した場合は、それが創作となるのです。

今、幼児の合作した詩、雨はぶらんこに降つてゐる……は數回の吟誦から新しく生み出したものゝ一つであります。即ち、スチブソンの詩が刺戟となつて創作をうみ出したのであります。これが前のものがなくて出來た詩ならば大した創作ですが、それはあの五六歳の幼児に要求は出來ますまい。今迄言語表現としては僅に、自分の思ひを相手——多くの場合兩親兄弟——に傳へる位であつたものが、詩の形なり、表現の言葉なりの適當なものが出來ません、或物の形なり、動きなりに相當する表現言語の數が、ごく

少ない頃なのです。さればこそ、猶更この詩を暗誦すること、藝術的情趣の豊かな指導者に選ばれたる數々の詩を暗誦し吟誦する事が折々必要であると存じます。

#### 4. 創作についての心ぞへ

イ、事物をありのままに見る事

ロ、幼児のこゝろを聞きのがさぬやうに、

イ、事物をありのままに

幼児の生活をしづかにながめて居ますと常に事物をよく観る、感じる、歌ふ、躍る、叫ぶ、遊ぶ等實にありのままの自分の生活をして居ります。故にこの幼児の表現したところの言葉それ自身が立派に詩になつてゐます。それが大人に於ける詩の形には遠い隔りがありますが、純眞無垢の尊さを持つて居る幼児の心で物を觀その心で表現した言葉は立派な詩と云へませう。子供の創作について決して大人の要求を加へてはならない事です。事物をありのままに見させて、思つたままに表現させる事は、詩の創作への最もよい、最もやさしい指導であります。

ロ、幼児のことはを聞きのがさぬやうに

常に先生が、幼児のことにばに注意してゐる事は、幼児からの創作を見出すことでございます。幼児の折々の言葉を大人が詩だと思つてゐない事が往々あります。まして幼児自身にはそれがわかる筈はありません。それ故折角幼児が思ひがけずよいものを發表して居ても、それを何とも思はないで大人が聞き逃して居るのです、そばに居る先生が常に氣を止めて、子供の言葉を聞き手近に紙と鉛筆とをおいて記し止めておく位の、親切を持つて居るべきであります。創作したものについて、先生は一指をも觸れてはならない事ですが、幼稚園の先生は、絶えず幼児の周圍にあつてよい保護と、よい導きと、よい暗示と親切な心ぞへと注意とで、怠らず見守つて行かねばなりません。

## 5、吟誦の價値

イ、幼児のいひたい事を云はせて貰ふ満足

ロ、直接記憶

ハ、正しい言葉及正しい發音練習

ニ、創作への刺戟

ホ、その詩の内容から與へられる性情上の影響

イ、幼児の云ひたい事を云はせて貰ふ満足

吟誦することによつて、子供自身も云ひ度いと思つたことを、云はせて貰ふ満足が出来ます。詩感といふものが大人になつてから起るもので無く、幼稚園に通ふ頃のあの子達には、すでに立派に芽生えてゐる事です。活動が盛んな爲に、ともすれば無いかのやうに思はれますが、折々かういふ状態を見うけることができます。幼児の心の中に、おぼろげにつかみ得た觀念内容(詩感)を、吟誦する、即ち自分のものとして發表することで、はつきりと、幼児の心の中を整理することになるので、幼児自身にとつてもまことに愉快なことになるのでございます。大人で申しまして、山の壯麗さ、雄大さに心をうたれたとしても、この場合この感じに胸を打たれたとした時、是れを表現する言葉、即ち自分で、詩なり、歌なりを作り得られれば非常な満足であります、これが出来ないとしても、誰かの山の歌、誰かの山の詩を、吟誦する事により、心の中を整理された、

思ふ事をいひあらはした様な愉快となる、あの心持ちでございます。

### ロ、直接記憶

記憶に二種ございます。一つと以前の事を覚えて居るといふこと、すぐ直前の事を覚えてゐる事と。吟誦はこの後者の直接記憶であります。即ち、先生が「われらのこつきは日の丸のはた」と云つて、幼児がすぐこれをくり返す。今きいた言葉をすぐ云つて見る、直接記憶でございます。例へば、○△□等の書いてあるカードを一度見せて、伏せて、それを書かせる、さつき見たものをお書きなさいと云ふのと同じ、記憶力を養ふ爲に記憶練習を行ふのでございます。

記憶力の無くなるといふのは、時が中にはいるからで、時がはいらないのに忘れるのは幾分缺陷があると見るべきであります。

### ハ、正しい言葉及發音練習

これはごく小さい事ですが、國語練習、正しき言葉、正しき發音の練習が自然と行へるわけであります。幼稚園生

活の中に於いて他にかうした機會が殆んどありません。言語の爲に、發音の爲にでなく、なだらかな方法で、この練習が行はれませう。

### ニ、創作への刺戟（前出）

ホ、その詩の内容から與へられる性情上の影響等の保育材料は、みんなよい性情を養ふ爲にといふ條件で選ばれてゐました、談話、唱歌すべてこれであつたのですが、保育材料選擇の本來の主旨がそればかりでない事は云ふ迄もありません。但し皆無といふわけではなく、例へば前述の「ひのまるのはた」の詩からでも多分にこの目的が達せられませう。

以上私は、談話中で、はなしあひと、詩の吟誦について主におはなし致しましたので、是れを主とし過ぎる感があります。勿論あの童話をかたり傳へる事は度々いたしますし、人形芝居は見せて頂きますし、只私の談話の中で、此の二つを特にぬき出してお話したことをお断りしておきます。